沼尻紘一郎編輯

西南太平記

三号

下

A434
4

西南太平記三編巻之下

東京　沼尻絃一郎編輯

第六回

吉松陸軍中佐奮戰
并有馬藤太捕縛ふ就く

今回鹿児島縣下暴動の成跡を觀察せんふ暴徒ぐ
今日の挙動ふ及びたる抑何をかつて第一緊要の
目的とするや賊軍ハ日夜熊本ニあつて連發せ
しゲ官軍一手を南の関へ操込んとて此處ニ本営

48-7787

と置き参謀野津少将あり三好少将ハ進んで高瀬口ゟ向ひくゝ敵の兵を進撃せしめしに賊軍ハ弱兵と以ゝ之ゟ應ト別軍をとりつゝ陰ゟ菊地川を渉りて山鹿の方ゟ直ちゟ参謀三好少将の本陣の側らゟ出て急ゟ進撃したりしと

亦一説ゟ云ふ高瀬川をわたりて一名菊地川とゟ古菊地武重の舊城跡なり菊地の町ハ人戸七百餘熊本ゟ八里熊本ゟ山鹿ゟ七里人戸千百軒餘此地ゟ温泉ありて西郷六将川尻ゟ通ひ来るとゝ大津ゟ熊本ゟ五里大津ゟ人戸四百計り東北ハ至て険阻あり

て阿蘇町ゟ小倉ゟ到るべし

山鹿菊地ハ賊軍頻りゟ往復する官軍事の不意ゟ出たるを以て一時ハ隊兵少しく驚動し三好少将福原大佐等も手疵を負ひたれども更ゟ屈せず力戦せられ備三好少将ハ山鹿口の

賊ハ當り野津少將ハ南の関の本営と同五日朝繰出し高瀬口ハ進ミ官軍始めハ両道ハ分れ連戦勝敗あり山鹿口ハ敵の要地ハして其兵最も強きがゆゑハ互ニ激戦して過る三日ニ吉松中佐必死の勇を振ひ奮戦し遂ニ賊軍の為ニ討死せし官軍進撃あり或ハ退き或ハ進ミ両軍大ニ窘しむこと数度ありて未だ全捷を得ざるを官軍ハ此所ニ土壘を作り迫々攻撃すべき策計ありと同

六日ハ戦ひ山鹿口の戦ひも官軍最も苦戦ハして三好少將ハ昨今矛疵の為めハ山鹿口の陣を退ぞきて南の関の本営ハありて諸軍を指揮せらるゝ三好氏の疵ハ去三十八日戦ニ額の右へ三ヶ所受られたり此疵少し〳〵深手なれども屈せず出陣して力戦及び勇氣まゝ〳〵盛なり又賊軍ハ別府新助ハ深手を負ひしゝ河野仲五郎山内半左衛門ハ去る三日の激戦ハ討死せしゝ五日ニ

吉松中佐賊軍ニ馳入リテ戰死ス
然光重

り六日ふ掛さ〻激戦し山鹿口の官軍ハ将官と何を
も野津大佐と参謀と〻〻進撃し或ひハ大山少
将三浦少将ゲ續て進撃とゐり山鹿口本営と防ぎ
賊と追退けんと戦ひしゲ賊軍ハ田原坂の嶮ふ據
て官軍と拒むての所ゐハ賊軍の砲臺三ヶ所あ
り官軍ハ仰で之れゐ進撃したりけれども拔く
ゑ能ハず暫時の激戦ゐ漸く臺塲二ヶ所ハ千辛万
苦して攻め取りたれども餘の一所ハ賊兵固く守

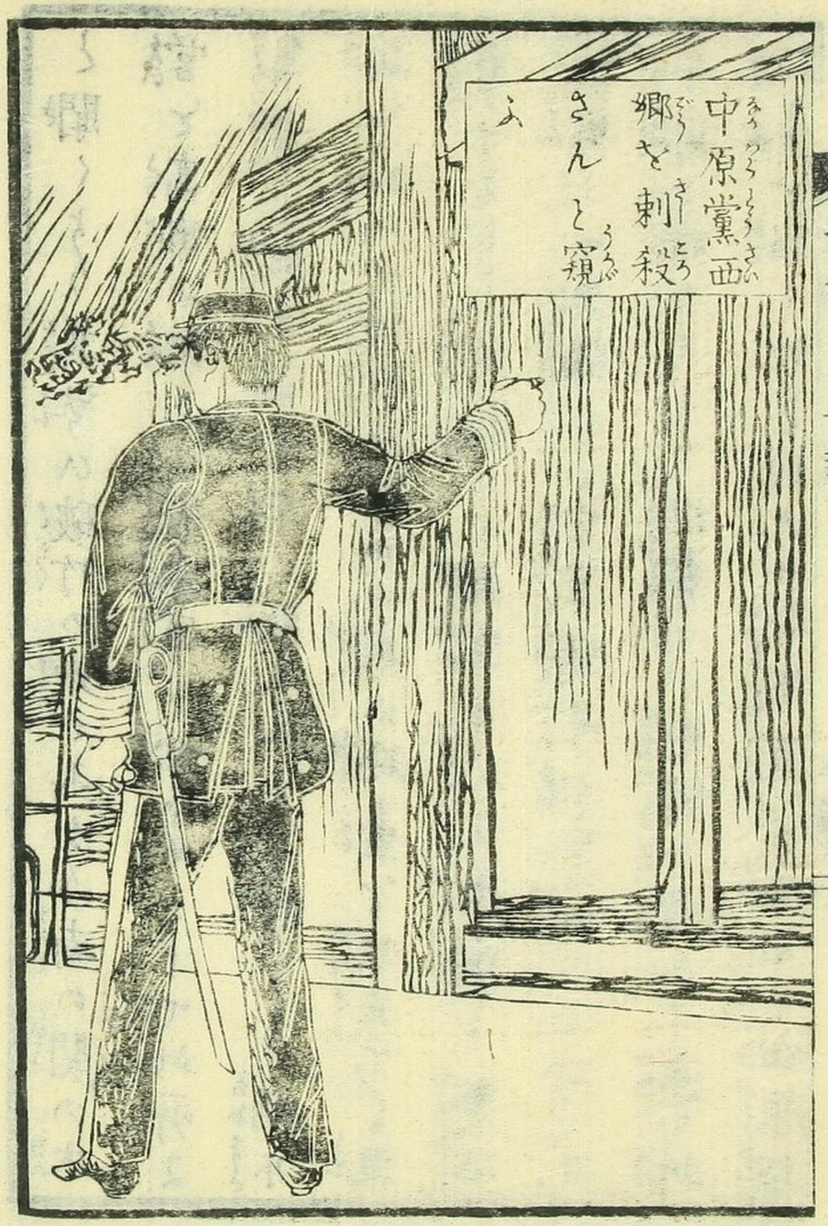
り官軍三方より進撃しその後ゐ出ると雖ども攻
落し得ざ也ゐ同七日ふゐ早朝より又々攻撃し打
ども衝ども未だ之れを拔く能ハずと蓋し此坂と踰
れゐ植木ハ手裡ふ在るゆ官軍の一隊ハ伊坂よ
り進こたり然れゐ吉次越ふ於て激戦あり〻も一
時官軍敗走したりしゲ忽ち奮撃突戦したるおの
勢ひふや乗ドけん是ハ野津少将ゲ率ひる所の軍
の分隊ならん此の吉次越と奪へ直ふ大久保ふ出

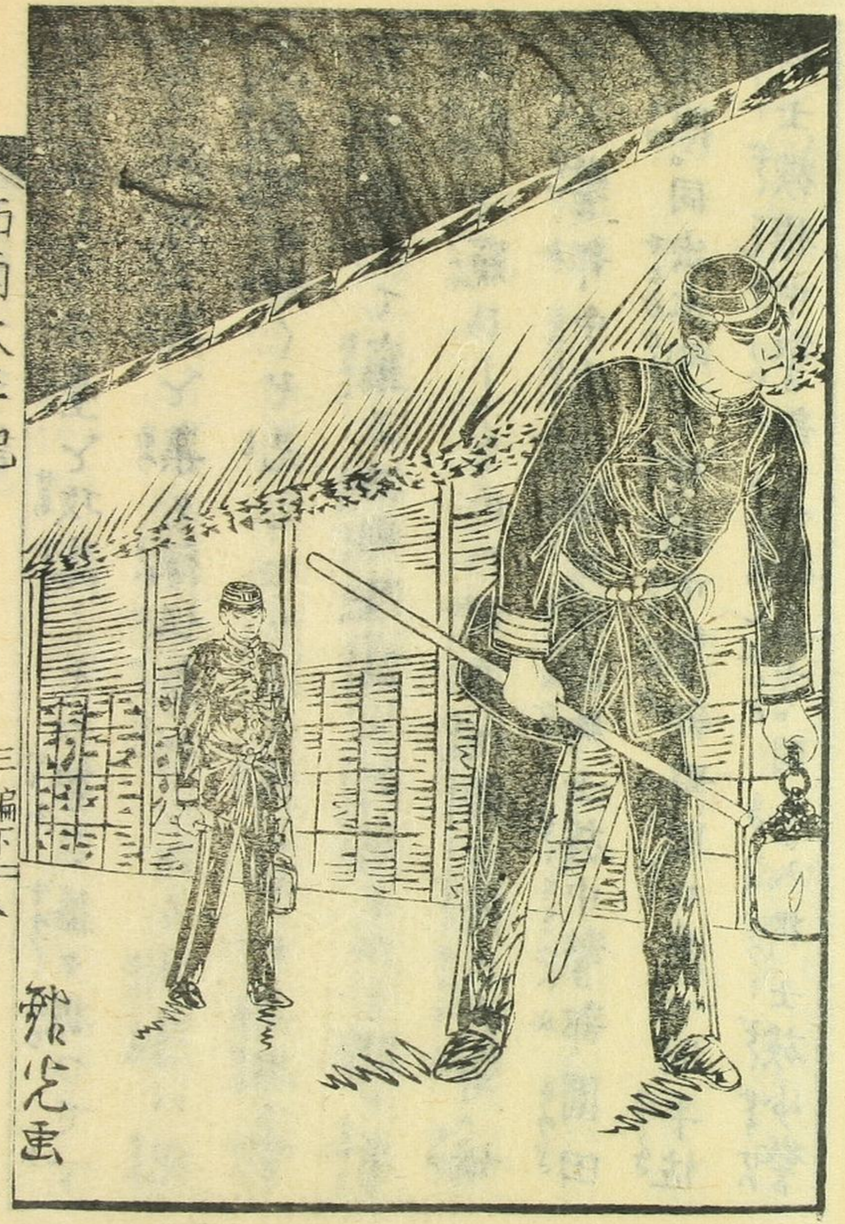
る事と得ると又官軍ハ河内口よりも進撃す河内口ハ白濱海岸ふかりて金峯山の傍ふ出て熊本城ふ通ずる路ふ是ハ海路より進むものるゝんと云へり以上數件を通觀すをに官軍ハ山鹿高瀬の二道を首として進撃せゝるをども山鹿口ハ攻むるふ甚ぞ困難なるをに砲壘を築き持重の策に決し高瀬口より矢庭ふ進軍せんとするをの如し盖し高瀬口ハ山鹿口よりも攻撃するの便

なるを以て吉次越との両道より進ミ高瀬口を取り續いて植木を取れを山鹿口の賊軍ハ熊本の賊軍との氣脈を断つを至らん然ればを官軍ハ労少くして功を奏するを妻からん又熊本鎮臺ふていハ初めより篭城の軍畧ふて城の近傍ふ人家なり障碍なる物ハ悉く焼拂ふふ付早々ふ立退きべきよしを市街へ布達せられ又安政橋ふて三十軒ぞうと坪井邊六十軒ふど焼

けたりおの後戦争の有る毎ゐ諸方い焼けたれど
も熊本市中の立退きの騒ぎい實ゐ筆紙ゐ盡さ
れず茲ゐ陸軍中将黒田清隆い玄武丸ゐ乗り込こ
外ゐ一艘の軍艦と都合二艘ゐ兵と乗せて五日
ゐ博多と出發し鹿児島ゐ赴うき勅使柳原公い
七日ゐ長崎と出帆せられたりおの護衛い軍艦七
艘ゐ兵士一大隊半巡査五百人ゐ弾鹿児嶋湾
ゐ入られたりと官軍い鹿児島ゐ勅使着さとし

と聞くより其勢ひ破竹の如くゐ南の関の本
営と高瀬ゐ移し山縣参軍と始めとして此所ゐ
集會し賊と一日も早く敗らんと軍議とる猶亦
兵と加へて田原坂ゐある賊の砲臺と攻立てく進
撃すること益烈しく賊軍も之ゐ應邀し雙方
苦戦して死傷多く官軍弾号令と厳ゐし同八日
午前十時ごろより進撃して暫時力戦るも遂ゐ此
砲臺と陷しいと同九日官軍直ゐ進んで田原坂


中原黨西
郷を刺殺
さんと窺
ふ

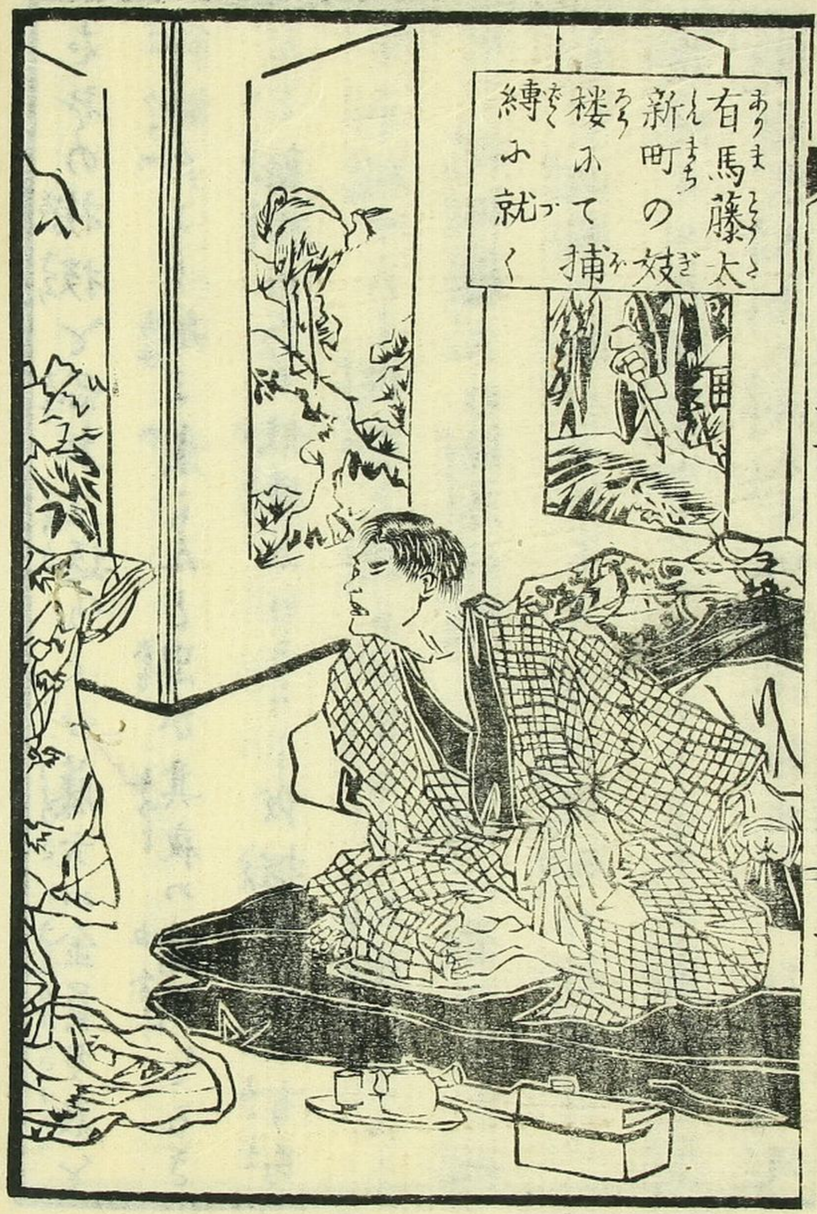

歌川光重

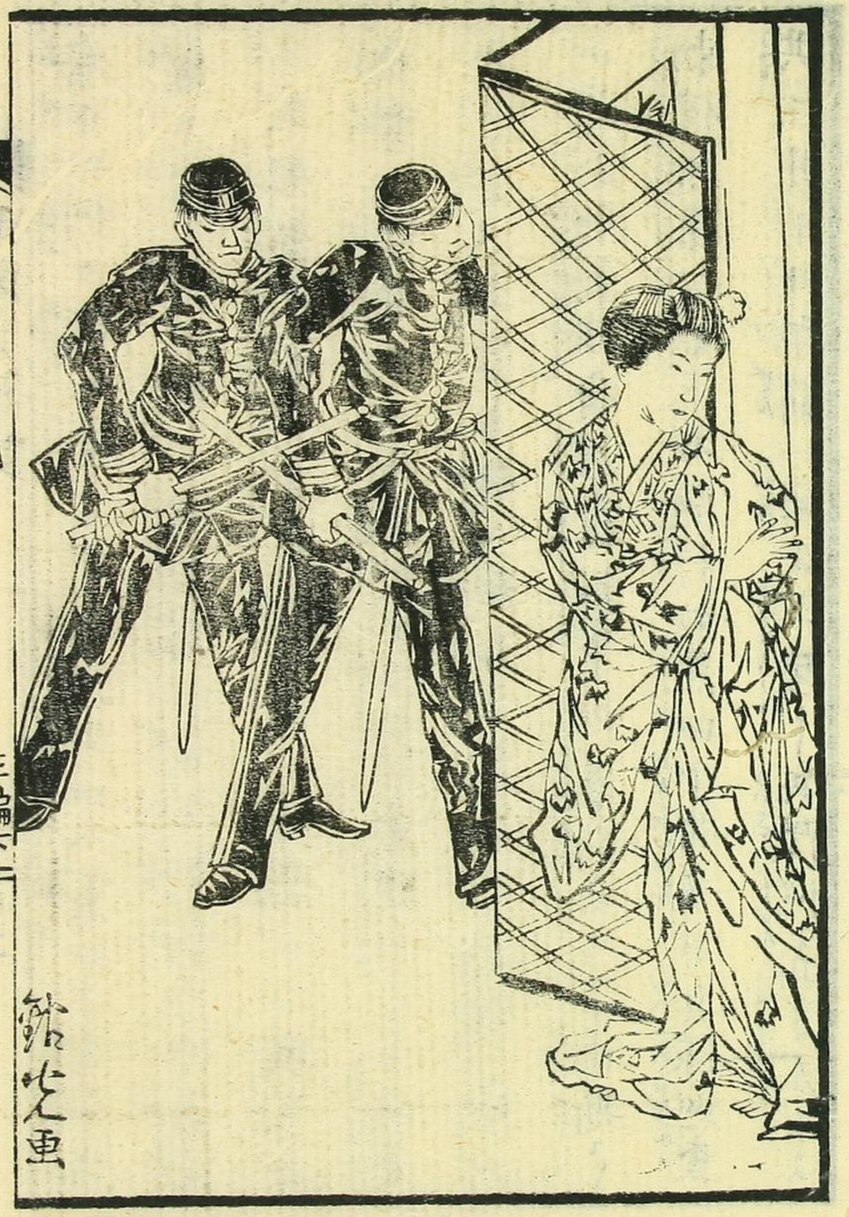
の昔後ろる砲臺と攻落しその勢ひ益々振つて一下先づ此所より兵と集め隊伍整列したる状態い宛然長蛇の如くぞ見えたりける茲より鹿児島縣の警察官吏よりて竊に西郷隆盛を刺殺さんと謀り屢惨劇と窺ひしそのい伊集院郷士族正兵衛。嫡子少警部中原尚雄。同牛山郷士族中警部園田長照。同出水郷士族權中警部野間口兼一。同平佐郷士族權中警部末廣直方。同喜入郷士族少警部安楽兼道。同加世田郷士族少警部土持高東京府士族中警部菅部誠美。鹿児島縣市來郷士族權少警部高崎親孝。同西田士族一等巡査樋脇賢助。同加治木郷士族伊丹親恒。同谷山郷士族書生平田才七。同加世田郷士族書生大山綱助。猪鹿倉保。同平佐郷書生田中直哉。同高岡郷士族權少警部山崎基明。同加治木郷士族四等巡査前田素忠。同帖佐郷士族四等巡査高橋為清。同平

佐郷士族書生柏田盛文。同蒲生郷士族四等巡査松下兼清同加世田郷士族二等巡査西彦四郎其外合せて三十二人外ゟ同縣士族好酔嬬子野村綱あるものあり各暴徒のためゟ千萬無量の非道ゟ遇さとて其外同縣下一般の地券証書と賊徒等ゟ取集め残らず焼捨て賊徒益々暴行をるゟ昨今西京大坂ゟ入込そ鹿兒島人い是非と論ぜず捕縛さそ〻ゟ前ゟ大坂と徘徊をて旧薩藩有馬藤太い身上惡き由薩の士族ゟい嫌ん色居たちものあゟが當時の形勢とゟて加入致し方き望をあるとど納れ間ゟく思ひ自ゟ一ッの功と立て度と土産ゟ加入せんと同志と集め頻ゟ密謀せゟ佐賀の士族石井武之助徳久孝次郎の両人い先年佐賀の騒ぎの時ゟい行衛知れずゟ有りゟが此ゟど大坂ゟゟく有馬藤太ゟ面會そて鹿兒島縣下の景況と聞くゟ沸騰せゟ士族ゟ多人

數熊本縣下國境へ出張しける旨風聞ありと言
けるに石井德久の両人い訳れをつげて鹿兒嶋へ
入り込を暴徒に組して夫々の兵を率ゐて出陣せ
しといふ訳をして大坂に滯留する有馬藤太府下を
巡りて種々の金策および或日午后四時とも覚し
き頃第三大區五小區薩摩堀り東の町邊の呉
服渡世女主人高橋たいの店へ同志の者何う金談
と申し掛けしが主人たいを女なれども豪氣なれ

どおの挨拶を恐れ立返りしが藤太い金員多数を
得神戸より船に乗らんと思ひ其夜い愉快をなさ
んと新町のなる妓楼へらりし探索方い有馬
を尋問せんと巡査と倶に打交りて出張るさんと
せし折柄藤太の同志の内より反心の者ありて此
事を政府へ訴へしけるを直様新町の妓楼へ
捕縛せられ檻倉入りとぞなりける又舊彦根藩
海老原大鳥の両人も同様捕縛せられたり大坂


有馬藤太
新町の妓
楼ふて捕
縛みく就



府下へ何ゝ穏ゝあゝずず安治川口へ着せ大分九乗り込る人の中ゝ熊本縣士族生駒新太郎岩間小太郎奥村軍記等と始じめ十三名おて國家の疲弊と坐視するゝ忍びず上京して建白する所ありと言ひ兵器も携へ居らざるを一ト先警察所ふ連れ行大坂府渡邊知事の尋問ありし由斯く勅使柳原公始ゝめ隨行の黒田中將及び兵隊巡査共三月十日午前一同ゝ陸ゝ兵隊巡査等左右ゝ

整列し勇氣凛然として護備せり偖從二位島津公の館ふおいて勅意を申し渡さる城下へ先づ無事あるべども弾薬等諸所ゝ隠しあるよゝ付速ゝふ着手ありて夫々ゝ御所分ありたりまゝ小荷駄等シゲトメより戦地へ兵粮その他を運搬するよゝの聞えありて加治木ふへ弾薬多分ありと付臺兵一中隊と巡査百名玄武丸おて同所へ出帆し警察官吏おて賊徒の為めゝ縛せられし中原を

始めの三十四五名其の他の拘留人をも請取るよ
り偖も官軍は是より速らに植木に向ひたるあぞ
是まで山鹿口高瀬口の両道と首として進こたる
官軍も大に進撃の便を得たりその他二條の間道
等なり同日午后五時官軍両間道より進撃せらる
るようつく賊軍は大いに勢ひ挫けし色ありと早
くも西郷の本陣に聞えしかば西郷隆盛は自らも
率ゐる戊辰年間伏水島羽奥羽函館等の戦争

に数度弾丸雨注の下を往来せし壮健あらるあを選
で之を防ぐんとする用意在りし折しも参軍河村海
軍大輔は軍艦数艘を以て川尻沖へ向けられたり
しと言ふ
一説に云ふ河村氏は鹿児島の人にして曾て
その國にありし時を薩人等同氏の兵を奇
兵と稱し篠原の兵を正兵といふ桐野の兵を
遊兵と唱へ兼ねて三傑と尊載せられし人た

山鹿高瀬の
両道ハ官軍
の進撃を
さえぎる

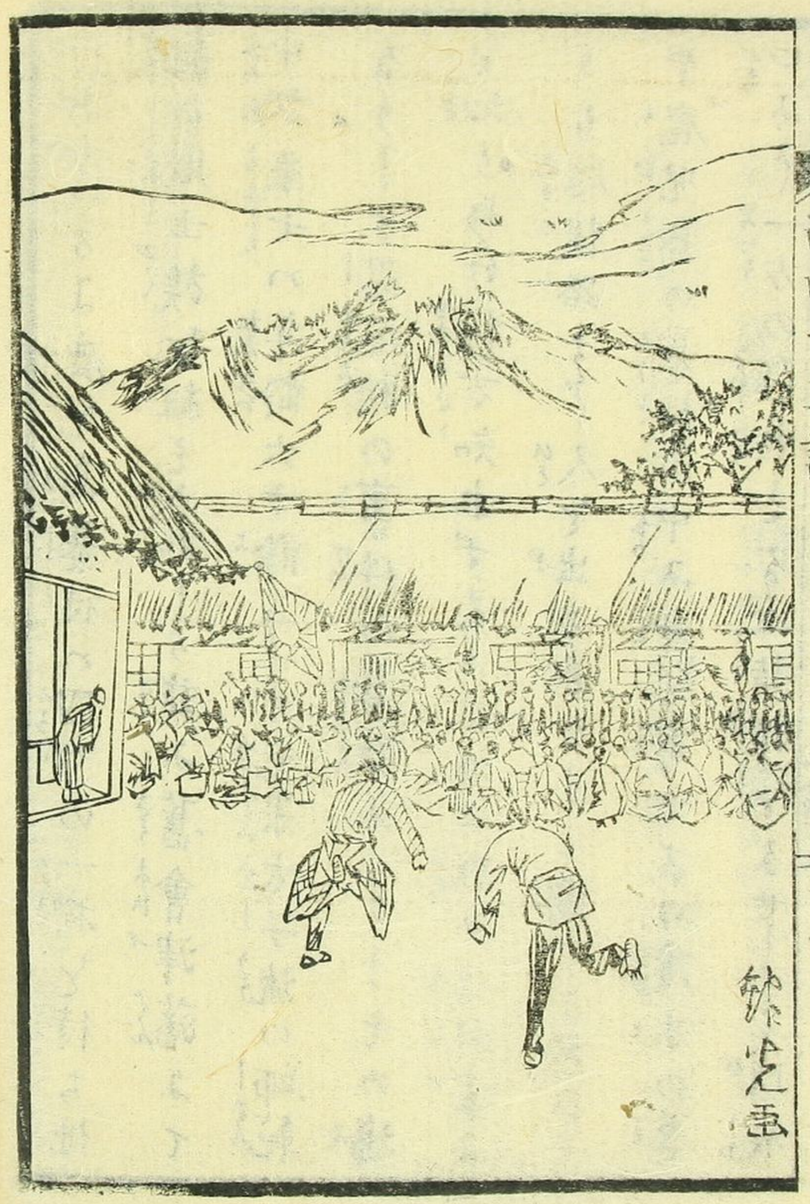
るとりつゝ薩人の持論ハ曰く二傑ハこゝに我
頭首たれゝ一且事を起さゝ河村も我が味
方のものゝ河村已に味方とるゝゝ海軍の
全權ハ我有りと自信一支と拳るに及ぶ
幸ひに河村大輔ゝ林内務少輔と共に薩海ハ
赴かれしをりつゝ賊徒ハ是ぞ天の賜のゝり
と河村氏と上陸せーめんと計しに河村ハ是
と察して上陸せず縣内の用向をらんゝゝ内

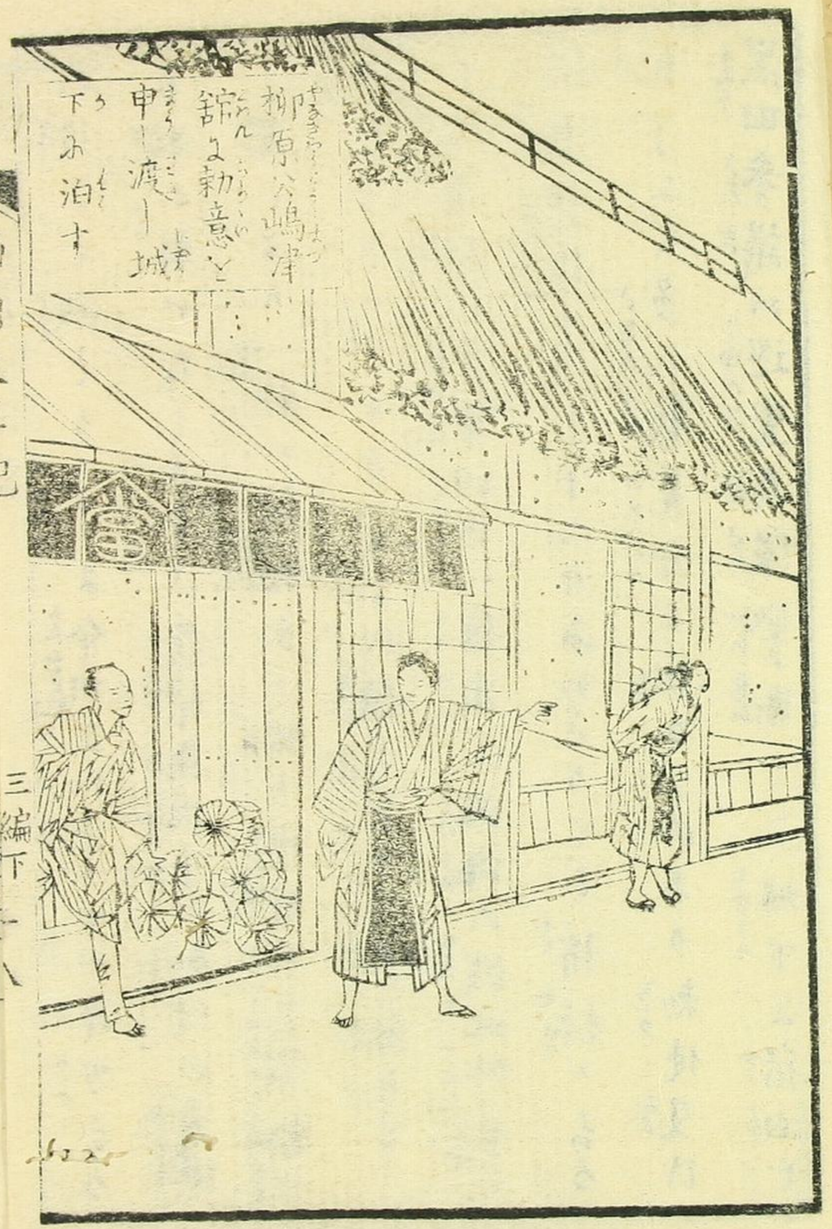
務の官員林氏幸ハ同道為ーたゝゝ之れを上
陸せーめんとの辞ハ薩人ハその遂ハ成すだ
かゝざる能知り且つ同氏ゞ断然大義を執つて
動らず若ー薩人軍隊と率ゝ上京すとも
海路を決して我ハ赦して許さずとの理言ハ
舌と捲きゝ路と海に取るとゝ我止め最初の
信憑大ハ碎け失望言ん方るく為めに官軍
と畏るゝハ至りしとゝ河村氏の膽畧人望

あること斯の如く豈真の英傑ふかるべきや然れど西郷と對戰するよ至らべきの策術亦大ふ所爲ある我信ずるなり

同十日ハ休戰あり　勅使上陸あるべく島津家退出の後ち城下を巡回ありしが貴島宇太郎ハ兼て英名とりつく聞えあるべき此の者を兵士二百名計りと募りて既ふ豊後路へ出發したるがごとへ西郷派とハ一派別種なりし貴島組沸騰して暴

行ありつるよ鹿児島暴徒ハ國々の一揆と待ち他縣の脱士族と組こ入れしが茲ふ舊會津藩ふて中根米七ハ年齢六十餘ふして元来太子流の師範なりしが思安橋の事件の暴徒ふくこしその場と切りぬけ行方知れずなりしが既ふ保科家よりも越後路まぐく人を出さたしと聞くよ思ひきや鹿児島の暴徒の中ふ身と寄せふの度木の葉口ふく一方の隊長となり指揮をるせしと戊辰




柳原公嶋津
錦の勅意と
申渡し城
下り泊す

の役ゐた敵とゐりしゐ今回ゐいくりてい身方ゐる
も賊の魁けなるんまゝ鹿兒島城下の勅使の着港
と聞くゐり一時い荷物ゐと取り片付け其騒動一
方なるゝざりしが十一日ゐん猶上と下へ拳動ゐせ
が肥後路い官軍四方へ操出し西海の戦地惨劇の
狀景想像すべし十二日ゐいくりてを稍穏ゐある
様子ゐて多人数見分ゐ出ゐものあり勅使及び
黒田参議い巡査兵隊警備ゐ城下ゐ宿泊せ

られ斯く征討大総督有栖川二品親王い筑前博多
の橋口町勝立寺ゐ假本営と置き征討の以所と
詳細ゐ告諭せらるゝ賊徒い熊本の四方ゐ屯
集して城中と窺ひしが賊ゐ與せしもの他縣へ
忍びしも計りがく海陸共嚴重ゐ警備ありし
まゝ東京華族の鷲尾隆聚い鹿児島の事件
と頻りゐ盡力ゐさんし既ゐ西海へ望ぞ鹿児
島へ出帆ゐさんとして前ゐ左の書面と宮内

省へ差し出さる軍費の内へ献金と願ひ出たり
方今鹿兒島縣下暴挙の賊徒追討被仰
出實ニ國家多難晨夕憂苦煩悶に堪へず
仍て献芹之微志と表し容嘗拜受家禄残
金之内二百円献納仕度候間軍資萬分之一
ゟ御差加被成下度此段奉願候以上

第五部華族

正四位鷹尾隆聚印

明治十年三月二日

宮内卿德大寺實則殿代理

宮内大丞山岡鐵太郎殿

武官ゟ東京より各地へ出張を命ぜらるゝ陸
軍少佐河津祐賢ハ下の関へ出帆し同裁判評事池
内重華ハ博多へ出帆し同二等副監督松本正足ハ
神戸へ同少佐村田經芳同少佐岡澤精同少佐岡田
善良同大河内正質一等副監督田村晋宗ハ神戸へ
向けて出帆あり

是より田原坂向坂大激戦續て八代口に至て官軍大野山乗取り奮戦のありつる訳は第四編に記載そべ―

西南太平記三編巻之下終

明治十年四月四日御届
定價二十二錢五厘
仝　十年四月十八日出版
編輯出版人　東京堀江町二丁目二番地　安達平七上宿　茨城縣平民　沼尻桂一郎
第一大區十四小區

萬笈閣製本各地專賣書籍館
江島喜兵衛

東京

北畠茂兵衛　林萬次郎
稲田佐兵衛　石川治兵衛
山中市兵衛　荒川藤兵衛
小林新兵衛　太田金右衛門
九家善七　北澤伊八
村上勘兵衛　朝倉久兵衛
中村佐助　青山清吉
牧野吉兵衛　鈴木忠藏
柳川梅次郎　山中孝之助
水野慶次郎　山中北郎

東京

東京山田藤助　東京吉川半七
同東生龜次郎　甲斐山梨　内藤傳右衛門
同岡田文助　伊豆三島　関谷利右衛門
西京大谷仁兵衛　武藏深谷　酒井省吾
同永田調兵衛　同小野脩三
同藤井孫兵衛　同鴻巣　長島為一郎
大坂柳原喜兵衛　下総佐原　朝野利兵衛
同前川善兵衛　同野田　茂木林藏
同前川源七郎　同布佐　榎本次郎右衛門
同吉岡平助　同谷市場　太田儀助
同松村九兵衛　常陸浪华　菊池儀助
同岡田茂兵衛　美濃大垣　岡安慶助
同梅原龜七　同平野利兵衛
同中島德兵衛　同久保田鐵藏

同赤志忠七　同岐阜水谷善七
伊勢四日市伊藤善太郎　同山岸彌左衛門
同山田加藤長平　同笠松玉井忠造
尾張名古屋片野東四郎信濃長野西澤喜太郎
同栗田東平　同上田伊藤甲造
同矢田藤兵衛　上野桐生竹内藤吉
同鬼頭平兵衛　下野宇都宮崎尾新右衛門
同鬼頭松次郎　同田野邊忠兵衛
同三輪伊六　岩代若松森萬助
同三輪文次郎　同福島齊藤彦太郎
三河舉母菅江笑三　陸前仙臺菅原安兵衛
同岡崎伊藤文吉　同白木安右衛門
同新城蔦家英吉　羽後秋田本間金之助
同豐橋高須又八　羽前上山高橋庄三郎

遠江濱松　落合清七　山形市村五郎兵衛
同　松塚聚人　同　平田彌平治
同　齊藤太兵衛　同　中川久助
同　山下仁兵衛　越中富山　土井宇三郎
同　一貫社　同　守川吉兵衛
同　白木健二郎　同　中川甚藏
同　見附古澤良作　同　大橋甚吾
同　二俣天井金藏　同　川上章
同　掛川大塚好五郎　同　高岡車平次郎
駿河藤枝淺井安兵衛　越後長岡　中村作平
同　靜岡佐藤俊平　同　松田周平
同　葛塚廣瀨市藏　同　弦巻七十郎
同　沼津吉成壽三郎　同四ッ谷濱村　佐藤友吉
同　小松浦吉　周防山口　阿部準輔

010190507616